

コリント人への手紙第一2章 「神の知恵」

1A 十字架の宣教 1-5

1B すぐれた言葉や知恵 1-2

2B 肉の弱さ 3-5

2A 隠された神の知恵 6-9

1B 神の奥義 6-7

2B 世の支配者たち 8-9

3A 御霊による悟り 10-16

1B 神の深みを知る御霊 10-11

2B 御霊による説明 12-13

3B 御霊による判断 14-16

本文

コリント人への手紙第一の 2 章を見ていきます。パウロが、コリントにいる人々に、人間の知恵やその話し方を大事にする文化に生きていることで、十字架につけられたキリストを宣べ伝えている理由を 2 章で話していきます。すでに 1 章で、彼は、信じる者には救いを与える神の力だと言いました。このキリストにこそ、神の知恵があるということをお話しました。

アイアンサイドという説教者がアメリカにいました。彼が伝道集会をした後に、ある人が名刺をよこしてきました。著名な不可知論者です。不可知論者とは、絶対的な真理は知ることができない、とする立場です。彼は、自分の講演会で聖書を批判して、嘲っていました。その講演会に招きます、討論をしましょう、ということになりました。それでアイアンサイドは、一つ条件を出していいですか？と尋ねます。それは、一人でもいいので、滅茶苦茶にされた人生が、あなたの不可知論によって変えられて、まともな生活に立ち戻ったという人を連れて来てくださいますか？と言いました。私は、数百人のそうした人々がいるので、連れていくことができます、と言いました。その不可知論者は、こりゃだめだ、となって、去って行ってしまいました。そうです、知識や知恵で福音が間違っていると論破しても、その不可知論で人は変えられません。けれども、福音で罪の中にいた人々が救われる力を、福音宣教者には持っているのです。

1A 十字架の宣教 1-5

パウロはこれから、自分がコリントに行った時に、そうしたすぐれた知恵とか言葉と言われているものに頼らなかつた、十字架につけられたキリストを伝えることに専念したことを語り始めます。

1B すぐれた言葉や知恵 1-2

¹ 兄弟たち。私があなたがたのところに行ったとき、私は、すぐれたことばや知恵を用いて神の奥義を宣べ伝えることはしませんでした。² なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストのほかには、何も知るまいと決心していたからです。

パウロが、コリントにおいて福音を語った時には、彼は敢えて、ソフィストと呼ばれる知恵者たちが使っているような、すぐれた言葉や知恵を用いませんでした。イエス・キリストを語ること、特に十字架につけられたキリストのほかのことに逸れていく話は控えて行ったのです。パウロは、決して雄弁に語れない人ではありません。使徒の働きを見れば、各地域で、ユダヤ人たちに神の国を論じ、イエスこそが来るべきキリストであることを力強く証しました。けれども、コリントにおいては、自分が知識やすぐれたことばに聞こえるようなことを語るものなら、十字架につけられたキリストを伝えなければいけないのに、そこから話が逸らされる危険があったのです。

ここで、「**宣べ伝える**」という言葉を考えてみたいと思います。これは、宣告するという意味合いになります。教えたり説明するのではなく、宣言するのに近いです。私たちの住んでいるところに、地方自治体からの放送が、町中で聞こえてきますね。「5 時半になりました、良い子のみなさんは、おうちに帰りましょう。」ということです。そこには、議論したり、理解し合ったり、そういった内容ではなく、そういうことなのだから、こうしてくださいという決まり事項を公に伝えるということです。

それと「**宣べ伝える**」は同じです。ここで「**神の奥義**」とありますが、ギリシア語の別の写本では「**神の証し**」とあります。神が、これが真実であり、事実であると証しておられることです。つまり、神がキリストにおいて行ってくださったこと、ということです。神が、罪の赦しのためにご自分の独り子キリストを私たちのために死に渡してくださったこと。そして、三日目によみがえらせたこと。これは、事実であり真実であります。このことを宣べ伝えています。ここには、議論でも、解釈の対象でもないのです。ただ、これこそが神の証しであると宣言するのです。

私たちは、しばしばいろいろな議論を吹っかけられます。その度に、何とかしてその反論に答えるべく、持っている知識を使おうとしてしまいます。けれども、こんな話があります。ある若い女性が、路傍伝道をしていました。真っ直ぐに十字架のキリストを伝えていたのだと思います。無神論者がやって来て、「ねえ、あのヨナの、大きな魚に呑み込まれたっていう話、本当なの？」と議論を吹っかけてきたそうです。彼女は、「科学的なことは分かりませんが、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。(Iヨハネ 1:9 から)」と答えました。また別の議論を吹っかけようとしてきました。それに対しても、「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」と答えました。神のみことばを、キリストの十字架のことばをそのまま宣言しただけです。そして無神論者はそこから去っていき、そのことばだけが頭にこびりつきました。そして、ついに、そのことばによって、イエス様を自分の救い主として信じ、受け入れたそうです。

2B 肉の弱さ 3-5

³ あなたがたのところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました。⁴ そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。

私たちは、使徒パウロについて彼が超人的な人だと思いがちです。けれども、彼はそんなことはありませんでした。彼がタルソスで見た夢で、マケドニア人に助けを呼び求められて、マケドニアのピリピに行きました。すると、そこで公然と人々の前で鞭うたれました。それからテサロニケに行きましたら、一気に騒然として、パウロを殺そうとする陰謀が発覚して、ベレアへと逃げました。そこで語るものの、なんとテサロニケからベレアまでパウロを追いかけてきた人たちがいます。それで、テモテとシラスは残して、自分だけアテネに向かいました。彼は一人だけで、アレオパゴスで福音を語り、それからコリントに移ったのです。

使徒 18 章には、会堂でパウロが論じていると、「彼らが反抗して口汚くののしった」とあります(18:6)。彼は会堂から場所を移して、神を敬う異邦人の家で語り続けましたが、多くのコリント人がそこで信じて行ったのです。それで、ある夜に、イエス様が幻に現れて、「恐れなさい、語り続けなさい。黙ってはいけません。」と言われたのです(18:9)。つまり、パウロは恐れていました。パウロとて、人々の口汚いののしりや、またパウロを殺そうとする陰謀を聞かされることとか、またその前には、むち打ちで背中に痛みや傷が残っていたことでしょう。それで、彼は、「弱く、恐れおののいて」いたのです。しかし、その中にあっても、神はパウロに語り続けなさいと命じられました。それで、パウロが元気を取り戻したか、恐れから解放されたかというところではなく、そのまま、弱く、恐れていたのです。ここが大事です。

そのような状況の中でも、人々が信じて行ったのです。私たちは、自分が良い状況にいて、良い心の状態でいたいと思います。そして、自分の状況が良ければ、人々にも良く伝わると思いかもできません。けれども、必ずしもそうではありません。自分が全く弱くされている時に、試練を受けている時に、その渦中でしたことが、かえって人々が福音に応答したりするのです。それは、ここに書かれているように、「御霊と御力の現れによるもの」になるためです。神は、私たちの肉体の弱ささえも用いられます。弱い時にこそ、強いのです。弱さに、キリストの恵みが完全に働くからです。

そういったことから、ますます、パウロの宣教のことばは、「説得力のある知恵のことば」ではなかったのです。聞こえは、弱々しいであったに違いありません。それでも、人々が信じて行ったのです。それが、「御霊と御力の現れ」によるものだからです。私たちは、御霊と御力の現れというと、豪快に語る人の説教で、人々の心が揺り動かされて、それで信じるといったことを想像するでしょう。いいえ、その反対だったのです。弱々しく語っている宣教者がいて、それなのに、人々がなぜか信じていくという動きだったのです。それが、御霊と御力の現れでした。

⁵ それは、あなたがたの信仰が、人間の知恵によらず、神の力によるものとなるためだったのです。

これは、とても大切です。もし、人間的な説得力で人が信じたのであれば、同じように、人間の議論によって反論されたら、その信仰は揺らぎます。そうやって人々は信仰から離れていきます。けれども、神の力によるものであれば、決して離れません。「ヨハ 10:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りません。」これほど、力のあるものなのです。神ご自身の全能の御手に、私たちが置かれるというそういった力です。だからこそ、パウロは、ことばの語り口を気にしているコリント社会においては、いろいろなことを論じて、肝心の十字架につけられたキリストを伝えることにかえって妨げにならないように、気を付けました。

2A 隠された神の知恵 6-9

1B 神の奥義 6-7

⁶ しかし私たちは、成熟した人たちの間では知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でも、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。⁷ 私たちは、奥義のうちにある、隠された神の知恵を語るのであって、その知恵は、神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定めておられたものです。

ここの内容は、午前礼拝でじっくりとお話ししていただきました、ぜひ聞いてください。成熟した人々というのは、十字架につけられたキリストにこそ、神の知恵と力があるのだと分かっている人々のことです。その人々には、ちょうど地上の幕屋が外側からはどす黒い幕しか見られないところ、信仰によって神のご計画にある栄光を見ることができる、ということをお話ししました。

では、そういったすぐれた神の知恵を、初めから語ればコリントの人たちが聞くのではないかとと思われるかもしれません。いいえ、全く逆です。彼らは、世の知恵と混同して、キリストの真理には至らないのでしょう。世の知恵は、自分の内にある自己中心性を素通りして、そこは見ないようにして世の中がこうなっているとして論じています。そこに真っ直ぐに取り組むのが、イエス・キリストにある福音です。だから、十字架につけられたキリストを信じないといけないのです。そして、信じて後も、十字架につけられたキリストにある知恵、神の知恵がいかにもすぐれたものか、圧倒的な違い、世の知恵とは次元の異なる違いがあるのだということを、成熟した人たちの間で語る事ができるのです。

ここで、「この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵」とありますね。これは具体的には、キリストを十字架に定めたローマ総督ピラトや、ピラトと心をつなげたヘロデ王がいます。パウロがこの手紙を書いている時に、すでに二人とも罷免させられているか、この世からいないのではないのでしょうか？その時に政治的な思惑で知恵をもって十字架につけたけれども、彼らは過ぎ去りました

が、イエス・キリストの主権は信じている者たちの間で、諸教会で広がって行ったのです。なんせ、その彼らが取った決断こそが、神の永遠の救いのご計画の中核の中で用いられたのです。

2B 世の支配者たち 8-9

⁸ この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。

世の支配者たちは、人間的には非常に知恵があります。知恵があるからこそ、多くのものを支配することができます。その彼らでさえ、全く知ることが出来なかったことです。私たちは、これだけの知識のある人であれば、このようなことが分かってもいいのではないか？と思うかもしれませんが、いいえ、それでも全く分からないのです。もしわかっていたら、彼らにとっても支配者であり、主権者でもある、栄光の主を十字架につけるなんて愚行に走らなかつたでしょう。総督ピラトのことを思い出しますが、彼の妻が、イエスという人には手を出さないように夢で苦しめられたと伝えていましたが、やはり手を出してしまったのです。何も分からなかつたからです。

ですから、私たちが福音ではないところで熱心になってしまったらどうなるのでしょうか？そこにある知恵は、第一に、神の知恵、奥義については無知であるということ。第二に、栄光の主ご自身を十字架につけるようなことになる、ということです。ですから、この世の知恵と神の知恵は相いれないのです。どちらかではないのです。

ところで、イザヤ書 52 章に、王たちがイエス様の姿を見て驚愕している預言があります。有名な、メシアが民の咎のために傷を受けるといふ預言 53 章の手前にありますが、主が栄光の輝きをもって再臨される時についての預言です。「52:13-15 「見よ、わたしのしもべは栄える。彼は高められて上げられ、きわめて高くなる。14 多くの者があなたを見て驚き恐れたように、その顔だちは損なわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。15 そのように、彼は多くの国々に血を振りまく。王たちは彼の前で口をつぐむ。彼らが告げられていないことを見、聞いたこともないことを悟るからだ。」」王たちは、まさか傷だらけの顔が、十字架につけられたイエスがその王なのか？ということに驚愕するのです。栄光の主といえば、光り輝く王座に、威厳をもって着いている人でなければいけないのに、ここまで酷い仕打ちを受けて、しかも時の支配者がそれを行うようにさせたということで、二重の驚きなのです。

⁹ しかし、このことは、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛する者たちに備えてくださった」と書いてあるとおりでした。

世の支配者には全く分からないようにしているのは、神ご自身の意図でした。だれもが目で見ることがないもの、耳で聞いたことがないもの、心で思い浮かびもしなかつたものです。全く次元の

ことなるものをご用意されていました。それが、天地万物を造られた方が、ご自分の独り子を十字架において死なせるというご計画です。

しかし、ここで大事なのは、「神は、神を愛する者たちに備えてくださった」というところです。神に愛されている者たちが、それを知り、その備えを自分のものとすることができます。神の知恵というのは、神との関係にあります。神を父とし、その御子を自分の主として受け入れるという関係の中で、与えられます。その交わりがあってこそその知恵なのです。多くの人が、聖書についての注解書を読んだり、神学書を読んだり、その他の信仰書を読んで、それで自分は知ったかのように思ってしまいます。けれども、イエス・キリストとの霊における交わりがないところには、知恵がないのです。キリスト・イエスの中にこそ、神の知恵があるのです。イエス様がこう言われましたね、父なる神に祈られました。「マタ 11:25 天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。」

3A 御霊による悟り 10-16

では、どのようにして、そのような、世の支配者でさえも、思いつきもしないような知恵を、神を愛する者たちには分かるのでしょうか？それは、神ご自身の霊が私たちに与えられるから、というのが、次のパウロの論じるところです。パウロはすでに、自分の宣教が、御霊と御力の現れによるものだと言っていました(4 節)。神がキリストにあって行われたことを宣べ伝えている中で、神ご自身が聞いている人々、信じて聞いている人々に聖霊を降り注がれます。コルネリウスの一家がそうでしたね。またガラテヤ人の手紙には、十字架につけられたイエス・キリストがはっきり示されて、それで御霊を受けていることをパウロが話しています(3:1-2)。

1B 神の深みを知る御霊 10-11

¹⁰ それを、神は私たちに御霊によって啓示してくださいました。御霊はすべてのことを、神の深みさえも探られるからです。¹¹ 人間のことは、その人のうちにある人間の霊のほかにも、いったいだれが知っているでしょう。同じように、神のことは、神の霊のほかにはだれも知りません。

御霊は、三位一体の神の第三の位格ですね。御霊は神ご自身です。ですから、父なる神の思いの深みまで、御霊は探ることがおできになります。私たちは、人の心の動機についてはかり知ることとはできませんが、本人の霊はその深いところまで分かっています。それと同じように、神ご自身のことは、御霊ご自身が知っておられるということです。

2B 御霊による説明 12-13

¹² しかし私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神からの霊を受けました。それで私たちは、神が私たちに恵みとして与えてくださったものを知るのです。

非常に大事なことが書かれています、この世の知恵は世の霊から来ていますが、私たち信じる者たちは、神からの霊を受けました。そして、それは恵みとして与えられているのです。恵みだといふところが味噌です。つまり、自分がどれだけ知識を蓄えて来たのか、経験があるのか、そういったことは全く、神の奥義を知るのに役に立たないということです。神から一方的に与えられる祝福、御霊によって初めて知ることができます。

¹³ それについて語るのに、私たちは人間の知恵によって教えられたことばではなく、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばによって御霊のことを説明するのです。

パウロが、教える側にも御霊によらなければできないことを話しています。イエス様がその模範ですが、「ヨハ 6:63 いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。」神は、聞く者たちにも御霊によって、ご自身のことを理解させ、また語る者にも御霊によって、その言葉を与えられます。したがって、私たちは絶えず、聞くにしても、語るにしても、御霊の注ぎが与えられるように祈る必要がありますね。

興味深い話を聞きました。牧者チャックのところに、ある老齢の姉妹がやって来て、聖書箇所について、「これは、こういう意味ですね？」と尋ねてきたそうなんです。チャックは、その意味を聞いて驚いたんです。ものすごい時間をかけて、ギリシア語も調べて、それで苦心してようやくたどり着いた結論と同じだったそうです。どうして、神さま、あなたは不公平な方なのですか？と思ったそうです。これが、聖霊によって聞くことですね。彼はしばしば言いましたが、「学歴が小学校卒業でも、信仰に満たされ、御霊に満たされている兄弟が、聖書を説き明かすほうが、ギリシア語もヘブル語も習得して原文に精通しているが、御霊による新生体験を持っていない大学の教授の話よりも信用する、ということです。

3B 御霊による判断 14-16

そして、世の知恵と、神の知恵について、パウロは御霊が決定的な違いを生み出し、御霊がおられない人には、全く知る由のないことなのだと語ります。

¹⁴ 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。

「生まれながらの人間」とは、御霊を持たない人です。イエスを自分の救い主と信じ、受け入れていないので、御霊によって新たに生まれていません。神を認めていないので、心が頑なにされていて、それで知者であると言っても無知になっている人です。「エペ 4:18-19 彼らは知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、頑なに心のゆえに、神のいのちから遠く離れています。19

無感覚になった彼らは、好色に身を任せて、あらゆる不潔な行いを貪るようになっていきます。」

これが、パウロが 1 章で、「滅びる者たちには愚かなこと」と言った理由です(18 節)。神のことについては、御霊によらないと、全く愚かなものであり、だから、どんなに世の知恵と福音に整合性を持たせようとしても、出来ない話なのです。それを行おうとすれば、先ほども話しましたが、結局、世的になります。つまり、神の奥義について無知になり、イエスご自身を否定するようになっていってしまうのです。相いれません。

私は、知性を使って伝道することに反対しません。いや、知性を尽くして主を愛しなさいと神は命じられていますから、知性を十分に活用した伝道は大事であります。弁証論または護教論というものがあります。それは、世の人々に対して、世にもある論理を使って、福音の真理の妥当性を弁証することです。私は、こうした働きもとても貴いと思っています。パウロ自身、ユダヤ人に対して、神の国を説得し、論じました。しかし、その人が信仰に至るのは、全く御霊によるのです。その人が理解しても、理解しただけではまだ救われていません。自分自身をイエス様に主としてお任せするようになるのは、聖霊によることしかできないのです。

ですから、私たちの務めは、はっきりと、混ぜ物をせずに福音を語ります。そして聖霊が、そのことばを使ってくださることを信じます。自分は、世の知恵と混ぜ物をせずに語ることが務めで、その後は聖霊が責任を取ってくださるのです。

¹⁵ 御霊を受けている人はすべてのことを判断しますが、その人自身はだれによっても判断されません。

生まれながらの人とは対照的に、「御霊を受けている人」がいます。御霊についてのことは、愚かであるとしか見なかった、生まれながらの人とは対照的に、「すべてのことを判断します」と言っています。これは、量的な知識のことではありません。先ほども話したように、関係から来る判断と知識です。神に愛されているという安心と確信から来る、あらゆることです。

ですから、救いの喜びについて知っていますが、それは人間のことばでは言い尽くすことができません。「I ペテ 1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。」人間のことばを超えた、栄えに満ちた喜びが与えられています。そして、平安についても、理解を超えています。「ピリ 4:7 そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」そしてキリストの愛も、理解を超えています。「エペ 4:19 人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。」人知を超えているのに、なんで知ることができるように、と祈っているのでしょうか！面白いですね、なぜなら、これは人間の生まれつ

きの理性をはるかに超えているけれども、霊においては知ることができることだからです。

そして、「その人自身はだれによっても判断されません」とパウロは言っていますが、これは逆に、どうして、こんな大変な状況で喜びがあるのか？平安があるのか？どうして、あなたは敵に対する愛に満ちているのか？だれによっても判断されない、不思議なものを持っています。

¹⁶「だれが主の心を知り、主に助言するというのですか。」しかし、私たちはキリストの心を持っています。

この質問は、しばしば聞きますね？「なぜ、神は人をこのようにして苦しみの中に入れるのですか？信じない者は、燃える火の中に投げ込まれると言いますが、善良な人も入れるのですか？」このような質問をするのは、主の心が分かる、主に助言できる、自分のほうが主よりも知っているというところから来るものです。ですから、本気で知りたいのではなく、自分が神を助言しようというぐらい、心が神への反抗心があるので、質問というよりも、挑みかかっていると言ってよいでしょう。

けれども、次の質問はしてくれません。「なぜ、神がご自分の愛する御子を、死なせるような暴挙に出たのですか？」という質問です。これこそが、どうしてこんな善良な人を地獄に送るのですか？ということにふさわしい質問です。良い方はひとり、イエスご自身です。この方が、十字架の上で神の呪いを受けなければならないのです。これほどの不条理はありません。そして、このことが受け付けられないのは、なぜそれほどのまでのことをしなければいけないのか？理由が分からないからです。それは、私たちの罪が御子の死をもたらしたという過酷な事実です。これを受け入れられないのです。自分がそこまで悪いことをしていないと思ってしまうからです。

けれども、御霊を受けている人は、「キリストの心を持っています」。神のとてつもない憐れみ、その豊かさのゆえに、キリストが自ら進んでご自身のいのちを与えられました。その心を知っています。

これが神の知恵です。キリストの心を知る力を、御霊によって与えられています。その愛を知らないでいるから、争い、挑みかかり、不安を心に抱えています。次回は、キリストを信じているのに、それでもなぜ争い、ねたんでいるのか？それは、肉に属していて、またキリストの幼子なのだということについて見ていきます。